二次元ぷち文庫
青空白雲
表紙イラスト：つづきますみ
試し読み版
魔導師女王

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔導師女王』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

魔導師女王

青空白雲
表紙／つづきますみ

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

フィーリア
エスター王国の女王で魔術師としても一流の腕を持つ。清楚可憐で芯が強く、国民からの信頼も厚い。

ブレーダ
汚職を理由に大臣から降職させられた初老の男性。非常に欲深い。

ディーク
魔の世界に住む者。フィーリアとエスター王国を手中に納めようと企む。

レオ
エスター王国の王子。まだ子供ながらも、ときどきフィーリアへねちっこい眼差しを向ける。

ユラ
エスター王国の王女。美しいフィーリアに憧れ、同時に嫉妬の情も持っている。

「全くとんでもないことをしてくれたものですね……」
若く麗しい女王・フィーリアはため息混じりに呟いた。細い眉が寄り、薄く眉間に皺が刻まれる。グロスを塗ったふっくらとした唇を噛みしめる。
会議室には女王、王女、王子、その他十数人を超える政府高官らが集まっていた。楕円形のテーブルで、女王と向きあうように座る最高国務大臣・ブレーダは苦々しい表情を浮かべている。
「国の政務のトップに立つ者が建設会社から多額の献金を受け取り、受注の便宜を図っていたとは。しかも、ブレーダ、あなたは経費をごまかし、酒宴や女に多額の税金を注ぎこんでいたのですね。はっきり調査書に書いてあります」
「申し訳ございません」
ブレーダは深々と頭を下げた。白くなった髪はだいぶ後退して、目元には隈が浮かび、頬はたるんでいる。でっぷり肥えた大きな体躯をしていた。国民が生活に困窮し、飢えを必死にしのいでいるかと思うと、大臣の不正に怒りが湧いてくる。
「最高国務大臣としての自覚に欠けるようですね。民を思い、国を思う。自分のことなど顧みずに政務に励む。それがあなたの務めでしょう」
「おっしゃる通りです。何も申し開きすることはございません」
そう答えながら、どこか老大臣の表情には苦々しい色が浮かんでいた。どうして自分が、

うまくやれていたはずじゃないかと、そう悔しがる卑劣な政治家の姿がそこにあった。こんな小娘に叱られるのはプライドが許さないと。

そんなブレーダに女王は怒りを露わにする。

「あなたには一度だけチャンスを与えます。あなたも最高国務大臣に就いて五年、確かに国の借金は減ってきましたし、産業も伸びてきた部分はある。他国とも良好な関係を築きつつあります。だから、今回だけは降職に留めてあげましょう。労働省の副長官に降格です。そこからやり直しなさい」

大臣からのかなりの転落に、一瞬、ブレーダの顔が屈辱に歪んだが、すぐに表情を整え、頭を下げた。

「陛下のご温情に感謝致します。これからは罪を償うためにも、精一杯働かせていただきます」

会議はそれで終了した。高官らが立ち上がり、席をあとにするのを眺めながら、フィーリアはため息をついた。

（本当は辞めさせてもよかったんだけど……。少し甘いでしょうか？）

フィーリアは腕を組み、息をつく。

小さな島国・エスター王国の女王、それがフィーリアだった。まだはたちである。シルバーの長い髪は背中半ばまで流れている。綺麗に揃えられた前髪の下には、細い眉にやや

吊り上がりぎみのアーモンド形の目。瞳は深い鳶色で、円ら。二重瞼で長いまつ毛が目元に薄い影を落としている。鼻筋はすっきり伸び、高めの優美なラインを持つ鼻を形成している。顔は小さな卵形。実に美しく、可憐な女王だった。

エスター王国は西を大陸に、東を大海に囲まれた小さな国。主に果実、野菜類、魚介類の輸出と、わずか二百年の国の歴史の中で育まれてきた文学、芸術などで産業を発展させ、少しずつではあるが、力を持ちはじめている。

しかし、やはり、国の財政は決して余裕があるわけでもなく、国民の大半は厳しい生活を強いられている。だからこそ、最高国務大臣の汚職は許しがたいものだった。

「レオ、ユラ、疲れたでしょう。部屋に戻って休みなさい」

フィーリアは隣に座る王子、王女に声をかけた。王子、王女といっても、実の子供ではない。フィーリアの後継ぎとして、王族の中から養子縁組を結んだのである。まだふたりとも子供といったほうがいい年頃である。

「陛下、ご立派なご処置でした。敬意を表します」

レオ王子は頭を下げた。栗色のマッシュルームカットの髪に、丸顔、まだまだ子供らしさの残る相貌だった。それでも、黒のタキシードスタイルが様になっているのは、やはり、王族としての威厳があるからだろうか。

「そんな、立派だなんて……」

「いえ、実に勉強になります。しかし、よくブレーダの汚職が分かりましたね」
レオ王子の熱い眼差しに少しばかり戸惑いながら、女王は小さくほほ笑んだ。
「わたしだけの力ではないわ。爺やが鋭く政務官らを睨んでいたのもあるし、大臣、高官たちともコミュニケーションを綿密にとってきたの。日ごろの努力が報われたわ。……このことはね、ブレーダの最高秘書官が教えてくれたことなの」
せりふの最後の部分は小さく伝えた。自分は王であるが、ひとりの政治家として、大臣、高官たちの意見もしっかり聞き、自分の間違いは認めるようにしている。謙虚さも自信と同様、王に求められることだから。
「陛下の細やかなご行動に敬服致します」
レオ王子がますます頬をリンゴ色に染めて、麗しい女王を見つめる。
「わたしもです。陛下、実に素晴らしいです。わたしも王族の一員としての決意を新たにしました。身が引き締まる思いです」
ユラが言葉を重ねる。ブルーとシルバーがミックスされた、肩にかかるくらいの長さに髪を伸ばしたユラも、あどけなさは残るものの、充分に美少女といえた。切れ長の目に、長いまつ毛、瞳は黒晶のように輝き、少し濡れたようにも見える。低めだが形のいい鼻と、ふっくらとした桃の果肉を思わせる唇が愛らしい。
（ユラったら……。またそんな目でわたしを見て……）

ユラの、憧れ、慕い、まるで恋い焦がれる乙女のような眼差しに、フィーリアは頬を染めた。いつからかはっきりとは覚えてはいないが、ユラは女王に恋慕の情をこめた眼差しを向けるようになっていた。あまりに若く美しい継母に惹かれているのだろうか。そして、その眼差しの中にわずかに嫉妬の情も覗く。同性として、継母の美しさが妬ましい、そんな複雑な思いもあるのかもしれない。

レオもユラも、優しく、民思いの少年・少女だと分かっている。そのことに喜びを覚えながら、若き女王はほほ笑んだ。

ガシャーンと盛大な音を立てて、テーブルからワイングラスが落ち、床に破片を飛ばした。赤ワインが絨毯に深く染みていく。

広い部屋に怒りの声が響く。

「あの小娘めぇ……。ただの若い娘だと思ったら、なんと鋭い……。ずっと注意を払って献金を受けてきたのに」

わなわな震えているのは、前最高国務大臣・ブレーダだった。

複数の建築業者から多額の金を受け取り、その見返りとして、受注に手を回し、献金してきた業者らに仕事を与えてきた。その他、経費乱用、妻子がいながらの派手な女遊びまで女王の耳に入り、職を解かれたのだが、これほどの屈辱はなかった。

前大臣はズボンをおろし、醜いペニスをさらけだした。見たくもないが、触手に顔の向きを正面に固定され、部下の肉幹を見てしまう。
「なんて汚らわしい……。死刑！　死刑にしてあげます！」
「ふん、小娘め。そんな権利は貴様にはない。貴様はすぐに王位を降りることになる。各大臣らを金で言い聞かせてやったからな。フィーリア陛下は王位にふさわしくないと。みな納得してくれたよ。王子も王女もな」
「なんと卑劣なっ……」
まだ若いが、それだけ真剣になって、国民を思い、他国へも気を遣いながら、経済政策や政治を行ってきたつもりである。税の負担を減らし、産業に力を入れ、この国独特の果物や海産物を収穫し、輸出業もうまく進んでいた。それなのに……。
「レオ、ユラッ。目を覚まして。そんな男の言うことをきいてはいけません。さあ、この卑劣な男を倒すのですっ」
ところが、ふたりは面白そうにこちらを眺めるだけで、動きもしない。
「いやっ。やめてっ。ブレーダ、考えなおしなさい。こんなことをしたらただでは済みませんよ」
「いくら貴様が騒いだところで無駄なこと。今夜からは王ではない。せいぜい、わしらを気持ちよくさせることですな」

ちょっちシーン
ぎゅっ読み
ここから
スタート！

老いた前大臣が目の前に迫ってきた。
（いや、いやよ……。やめて、やめてぇえええ）
ブレーダはまず、若き女王のあごに節くれだった、芋虫のような指を三本添えた。そして顔を上向かせ、ねちょ、とタラコ唇をフィーリアの柔唇にくっつけてきた。
（いやあああっ。気持ち悪い。しかも、臭いわ）
逃げ出したいが、触手群に身体をがんじがらめにされて、身動きがとれない。
唇が触れた状態はしばし続いた。ふー、ふー、ふぐぐぅ。荒く弾む鼻息がおぞましくて、鳥肌が立つ。背筋を戦慄が駆け抜け、カクカク脚が震えた。
ちゅ、ちゅう、ちゅううう。れろれろ、れろろろん、れろん。じゅるるぅ。
赤紫に肥大した舌を突きだし、左右に動かしながら、マシュマロ唇を味わう。フィーリアは顔をそむけることもできない。
「ふぐ、ぐひひ。たまらん。なんという柔らかい唇だ。ああ、いい匂いもするじゃないか」
ふがふが鼻を鳴らす。鼻翼が膨らみ、鼻毛すらわずかに覗く。太い眉が垂れ、瞳が野卑な光に輝く。ぶるる……と頬が震えた。唇の端から涎がつー、と流れていく。
目を閉ざした女王に、「目を開けろ。俺の顔を見ろ」と怒鳴り、おずおず目を開けたフィーリアを好色な眼差しで眺めながら、じゅるるぅ……と舌で女王のリップを舐めまわす。さらに、手が剥きだしの乳房を揉みまわす。優美なる円み乳が手のひらに押し潰れ、左右

に平たく美白肉が広がる。乳房に鈍い痛みを覚えた。
「さあ、口を開けろ。ほら、早くするんだっ」
低い声で怒鳴られ、ビク、とフィーリアが震え、つい唇が開いてしまう。その隙をついて、前大臣が肉舌を差しいれてくる。
（いやああ、気持ち悪い。ナメクジみたい。……く、臭い）
猛烈なアルコール臭と生モノが腐ったような匂いを籠らせて、舌が口内奥に侵入してくる。必死に舌を横に曲げ、おぞましい舌の交わりを避けようとする。しかし、そんな状態も長くは続かない。舌の根が痛くなってきた。ふっと力を抜いた瞬間、舌先を絡めとられる。
「ふぐ。ぐふうう」
眉根を寄せ、鼻筋に薄い皺を刻んで、フィーリアは呻いた。
ねとねとした舌に吸いつかれて、じゅるる、じゅるう、と唾液吸い音が耳に響く。手で耳をふさぎたいが、両手を縛られている。
その間、触手肉がねっとりとフィーリアのナイトウェアズボンにまとわりつき、薄い布をちぎっていく。ショーツを露わにされる羞恥に耳までが火照った。
（いや、見ないで。見ないで、レオ、ユラッ）
しかし、ふたりの義理の子供たちは継母の左右に立ち、熱い視線を注いでいる。憧れ、恋し、そして軽蔑している、そんな眼差しに、消え入りたい気分になる。

ブレーダの舌はねちっこく女王の舌肉を舐めまわし、唾液を送りこんでくる。節くれだった太い指は、木イチゴ乳首をコリコリいじくっていた。

（そんなに胸を、いじらないでっ……）

乳首をつままれ、びょーん、と引っ張られ、軽い痛みを覚える。だが、痛いだけではない。指の腹で圧するように揉まれると、じわじわとくすぐったいような、痛痒いような感覚が芽生えてくる。それが、いつしか、微妙な熱感に変化していくのに、フィーリアは気づいた。

歯茎を、口腔粘膜を、舌をたっぷりねぶりまわしてから、ブレーダはようやく唇の交わりを解いた。つー、と長い糸がふたりの唇をつなぐ。

「くひひ。キスされて感じてしまったかな？　どうだい、女王様よ」

ブレーダは醜く笑いながら、頬に口づけ、髪をかきあげ、白いふっくらとした耳たぶにも舌を這わせてきた。おぞましい感覚に身震いがした。背筋が凍りつくようだ。

くちゅ、くちゅ、じゅちゅ。くちゅう。じゅるる。

耳穴にまで舌を挿し込まれ、唾液たっぷりに舐めまわされて、ゾク、ゾクと悪寒が走る。ふー、ふー、と荒い息遣いが脳にまで響く。

そして、左右から手が伸ばされる。肩に、腕に、腰に触れてくるその指は、愛おしいわが子たちのものだった。

「いや、触らないで、レオ、ユラ……。母親になんということをするのです」

「陛下があまりに美しいから触らずにいられないのです。ああ、なんというもち肌だろう」
レオが熱いため息をつく。そう口にすれば、ユラも同じように思いを告げてくる。
「ずっと陛下をお慕いして参りました。同じ女性として憧れ、また、その美しさが憎かった。ほら、こんなにいやらしいお尻をして」
ユラがお尻を撫でてきた。遠慮がちな触り方はすぐに、ねちっこい、中年男のような撫でまわし方に変化した。ショーツの生地に指をもぐりこませ、お尻の谷間を指で上下させる。同性から愛撫を受ける、その信じられぬ事態に、パニックに陥ってしまう。指が触れた尻の谷間が、尻肌が妙に温かく、くすぐったくもあり、気味が悪くもある。
「いや、やめ……なさい、ユラッ。やめるのです。王族の者として恥ずかしくはないのですか」
「恥ずかしいだなんて……。わたしは陛下に触れられて、幸せなだけです」
ユラは背後に回り、十本の指で美尻愛撫の悦に浸った。レオは継母の剥きだしの腕にキスし、舌を這わせる始末。
ブレーダはそんな様子を満足げに眺めながら、いよいよ生乳房へと攻撃を移してきた。たっぷりと豊かに実った双乳はマスクメロンサイズ。そのふたつの充実肉を手指に包み、ぐにぐに揉みまわし、純白肌に唇を這わせていく。赤紫色の舌が白い肌をなぞる様子はおぞましく、気味が悪く、フィーリアはただただカチカチと歯を鳴らすのみだった。快感な

どはなく、唾液まみれの軟体物が這いまわるたびに、すさまじい汚辱感に「ひいい」とかすれた声をあげるしか出来ない。

つつー、と唾液玉が光りながら、胸乳ラインを伝いながれ、胸の深い谷間に沈んでいく。

れろれろ、じゅる。れろろん、じゅるるん。べろろん、ぬちゅう。

耳をふさぎたくなるような、生々しい舐め音に、「ひい」と声をかすれさせる。

「くはははは。フィーリアよ、どうだ？　部下に逆恨みされる気分は？　復讐されてさぞかし悔しいだろう。貴様のその屈辱、恥辱の情がじかに伝わってきて、快感だっ」

少し離れた場所で様子を眺めていたディークが灰色の犬歯を剥きだしにし、高笑いした。

「だ、黙りなさいっ。……元はと言えば、あなたが……絶対に許しません」

哄笑する妖鬼をフィーリアは睨みつけた。怒りに噛みしめられた下唇が白く変色する。

（魔術が使えれば、あんな奴、ひと思いに冥界に送ってあげられるのに……）

今更こんなことを言っても遅いのだがと、悔しさに胸が張りさけそうだった。

「まずブレーダに陵辱させてやる。くはははは、なんといい眺めであることよ。見ているだけで、笑えてくるわ」

（なんという恥辱！　でも、負けるわけには参りません）

いつか、隙ができるはず。そのときを狙うしかない。いつか、術力も復活するのではないかという期待があった。ディークによる術力封印も長くは続かないのではないかと。

触手群は彼女の耳の穴に忍び込み、うなじを這いずりまわり、さらには背中、腰、お尻を舐めまわした。いつしか、触手たちはペニスの先端そのものの様相を見せはじめていた。カリが膨れて盛り上がり、どす黒い亀頭肉がピンポン玉大に膨張して、鈴割れから涎を垂らす。烏賊のような、生臭い魚のような強烈な臭気だ。

「な、なんなの、これ。いや、気持ち悪いぃ」

数人の男どもに輪姦されている、そんなおぞましい錯覚を覚える。

「くおおぉお。たまらん、やはり女は若いのに限る。おお、気持ちいいぞ」

乳房に頬ずりし、べろべろん、と赤紫舌で乳肌を舐めまわしながら、老いた腰を盛んに前後スイングさせる。ぷる、ぷるる、ぷるるん。淡桃色変化した巨房が小さくダンスしては、勃起乳首の薄赤を宙に描く。

(あ、ああ、いや、いやなのに……。なんなの、これ？　なんだか身体がおかしいわ)

すでに、ブレーダによる牡幹抽送は数十回を迎え、次第にフィーリアは不可思議な感覚に襲われていた。熱い。子宮口から女壺全体にかけて、火花が散るように熱い。痛みがいつのまにか灼熱感になり、どろどろ蜜肉をとろけさせていくようだった。

「ふへへへ。どうだ。そろそろ感じてきたか？　ん？　妙に色っぽい顔をするじゃねえか」

老人はにやにや笑った。ぷはあ、と口臭のきつい息を吐きかけられた。

「な、なんでも……ないわ。早く、腰を引きなさい」

試し読みスター
えっちな

女王は卑劣な前大臣を涙で濡れた目で睨んだ。
「ふふん。口だけは威勢がいいな。さあ、いくぞっ」
老腰前後ダンスが急にピッチをあげた。どこか弾力のある亀頭肉で子宮口を打たれ、カリで蜜襞を擦られ、次第に処女を失ったばかりの女王の眉間に寄った皺が薄くなり、まつ毛はせわしなく影を躍らせて、頬に散った桃色が濃さを増していく。さらさらと細い肩を撫でる髪が、フローラルの微香を散らした。
若洞に生じたいくつもの火花が次第に激しく弾けだし、身体の中がぷちぷち鳴るようだった。いつしか、熱感は快感へと変化していた。官能のうねりは腰椎に、背骨にまで響き、肉も骨もどろどろに溶けていくかのような錯覚に、ふっくらと柔らかい唇が甘美な調べを奏ではじめてしまう。
「あ、あ、あん、ん、んああ、や、や、こんなの……こんなの、わたしじゃない……あ、あふん」
さらには、先端がペニス状に変化した触手群がフィーリアのうなじを、肩口を撫でまわし、トロトロと我慢汁を垂れながしはじめた。
（くうう……冗談じゃないわ。……でも……）
触手がお尻の谷間にもぐりこみ、肛門穴をつつきはじめた。汚辱に身を震わせ、怒りに唇を震わせながらも、なぜだろう、硬い触手亀頭にいじられることに愉悦を覚えはじめて

いる。
「いいだろう、え？　女王様よ。感じちまうだろう。たまらないだろう？　ぐへへ、ほら、もっと声を出していいんだぞ」
「いや、いやです。感じたりしません」
しかし、心は抵抗していても、身体は正直である。太幹による摩擦に、快感はぐんぐん熱をあげていく。今や、脚にまで性感波動が行き渡り、立っていられるのも、触手に支えられているからだった。ビリ、ビリリ……と小さな性感刺激が無数に腰で、子宮で弾け、そのたびに浅ましい声を漏らしてしまう。
「あ、あ、あん、ん、ん、や、や、やだ。……ひぐ、こんなの、いやあ……ぐ、ぐふ、ぐふぅぅ」
「おお、そんな可愛い声を聞いていると、わしも我慢ならん」
ブレーダが黄ばんだ歯を剥きだしにしてうなった。腰振りのピッチは最高潮に。
「くおおお、イク、イクぞ、うおお、なかに出してやるっ」
「いやあああ、やめて、なかはやめてぇえええ」
生理のリズムなど、忘れてしまっている。妊娠への恐怖が頭をもたげた。いや、この醜い老人に子種汁を注ぎこまれるおぞましさ、と言ったほうがいいだろうか。
どぴゅぴゅぴゅぴゅー、ぴゅぴゅ、ぴゅるるん、ぴゅん、ぴゅ、ぴゅるぅぅぅ。

熱い衝撃に、ガクン、と頭が揺れた。シルバーの長い髪が揺れて宙を掻いた。ふわり、と甘くはかないローズフレグランスが散った。汗とオーデコロンのミックスされた芳香も空気に溶けていく。

「くひひ……たまらなかったぞ。さあ、次はレオ王子、あなたの番ですぞ」

その言葉に、フィーリアは麗しいマスクを強張らせた。

「待って！　どういうことなの、それは。まさか、王子にも……。いやあああ」

すでに、レオ王子は全裸だった。身体は細いくせに、股間に生えた肉幹は隆々と天を睨み、太い威容を見せつけている。

「ああ、陛下。ずっと憧れていたんです、陛下に。夢を見ているみたいです。陛下、ああ、入っていきます、陛下のおま〇こにっ」

「わたしはあなたの母親なのよ？　目を覚ましてちょうだい。こんな下郎の言いなりになるなんてっ。……きゃあああああ」

少年王子は聞く耳を持たず、ずぷり、と鋼幹を打ち込んできた。つい、反射で若い牡肉を蜜肉が包みこみ、抱きすくめてしまう。

さらには、王女が女王にすり寄り、背後からたっぷりと実った双子乳を揉みしだいてきた。

「ユラッ？　なにを……なにを……、あ、あ、あん、ん、んあああ」

乳首をつままれ、いじくりまわされて、さらには若いペニスに責めたてられて、甘い声を漏らしてしまう。ブレーダよりも硬く、逞しい肉幹による、稚拙ながらも情熱的な責めに、継母は瞳を潤ませ、小鼻をぷっくり膨らませ、口をだらしなく開けた。

「あ、あ、ん、んあああ、や、やん、あん、ああ、こ、こんなの、許されないのにぃ。ああ、んあああ」

「うふふ。お義母様、可愛らしい。エッチな声を出して……。ユラも、おかしな気分になってしまいます」

愛する義娘に耳たぶを舐められ、耳の穴まで舌で愛されて、頭がくらくらしてくる。さらに、レオ王子は頬を火照らせ、あどけない顔を喜悦に歪めて若い腰をダンスさせている。そして、いよいよ触手亀頭がぐりぐり……と菊肛をこじ開けて侵入してくる。

「きゃあああああ」

処女喪失以上の激痛に、一瞬気を失った。目が覚めてみると、確かに、肛門に硬いペニス触手が嵌まりこんでいる。

「くはははは。女王のケツの味、なかなかだぞ。この締めつけはたまらん。すぐに出してしまいそうだ」

二メートルほど離れたところから、妖魔が高笑いをする。触手群は、妖魔とつながっていた。触手で性感を味わうことが可能なのだろう。

ぐりぐりと直腸管奥まで硬い触手ペニスが嵌まりこみ、盛んに前後出し入れ運動を行っている。触手が出ていくときは、あたかも便がひりだされるような感覚になり、中に入ってくるときは、便が逆流するような圧迫感があった。そして、その息苦しさの中に、痺れ、溶けてしまいそうな愉悦のうねりが感じられた。前で感じるのとは、ひと味違う、中毒になりそうな予感のする甘さがその快感にはあった。

（うそ、うそよ！　お尻に挿れられて感じるなんて……。そんなこと、絶対にあるはずがないわっ）

自分がそこまでの変態に堕落してしまったのかと、深い悲しみが胸を覆い尽くす。

そして、すぐ目の前にいる王子が恍惚に整ったマスクをすっかり下品に歪めていた。

「あ、あ、あ、イキます、陛下、イキますよ。くおおおお」

「いやああ、だめ、だめよ、レオ、あ、あ、あん、だめ、だめらめぇええ」

ぐぐっと背をのけぞらせ、少年王子が盛大に射精する。

どぴゅぴゅぴゅー、どぴゅんっ、ぴゅぴゅん、ぴゅぴゅ、ぴゅぴゅー。

さらに、少年王子は牡腰乱舞で快感を貪ろうとする。若いだけあって、ペニスは全く衰えていない。背後からは、ユラ王女が女王の耳穴を舐め尽くし、うなじ、肩、背中に舌を這わせながら、ぴんぴんに張った乳首を指でいじくりまわしている。触手は肛門穴を五回、十回と前後して陵辱を続けている。直腸内に抽送されて、激しい愉悦熱がすさまじい勢い

で全身を溶かしていく。
「あ、あ、んん、んああ、や、やん、やだぁ……。こんなの、だめなのにぃ」
前後穴を好き放題陵辱されて、官能波動が背筋を突きぬけていく。口を呆けたように開き、涎を垂らす。
「くおお、イクぞ、フィーリア。たっぷりケツでも感じるがいいっ」
妖魔が叫ぶと、ぐぐ、と腸管内で触手ペニスが膨れ上がった。
どぴゅぴゅぴゅ、どぴゅるるぅううう。じゅぶうう。
「いやあああ、こんなのっ……。あ、あ、らめぇえええええ」
あとを追うように王子も射精する。熱い射精衝撃を前後穴に感じ、身体が宙に浮き上がり、液状に溶けていくかのような、圧倒的な快楽の嵐にさらされた。
「さてと。そろそろ俺にもヤラせてもらおうか」
ディークが近づいてきた。ネバついた触手がずぽ、とフィーリアの口内に突っ込まれた。
じゅぼ、じゅぼぼ、じゅぷ、じゅぷぷ、じゅぼん。
「ほら、舌を使わないかっ。全然気持ちよくないだろう。牝奴隷のくせに気が利かないな」
妖鬼は怒鳴り声をあげ、威嚇して、女王を仰向けに寝かせた。まだ十本を超える触手が彼女の濃桃色に上気した身体に巻きついている。肩に、両腕に、ゴム毬のような胸乳に、肛門穴に、むち、とした太腿に、にゅるにゅる……と肉が腐敗したようなすさまじい臭気

を放ちながら、絡んでくる。
口に突っ込まれた触手ペニスは臭くてたまらない。烏賊か貝が腐ったような匂いである。ピンポン玉サイズの亀頭はどこか弾力があり、ゴムのようでもあった。しかし、カリより下の部分は鋼のごとく硬い。それが、ずぼずぼと前後出し入れされ、のど近くまで押し込まれてくるものだから、えずきながら、涙をぽろぽろ零して、フィーリアは舌を亀頭肉に絡ませていった。
「さあ、ハメるぞ。女王様のおま○この具合はいかがかな？」
太腿に絡みついた触手たちが、ぐい、と二本の脚をM字に開いた。ぷっくり饅頭のように膨らんだ赤肌色の肉土手、縦に裂けた赤茶色の秘割れ、そこから遠慮がちに飛び出した色素の沈んだ肉花弁、それらが妖魔の邪欲にまみれたふたつの目にさらされた。
（いや……お願い、それだけは……）
憎き魔の者と交わるなど、おぞましいことこの上ない。いっそ、気を失ってしまえれば楽なのだろうが、恐怖がじわじわ脳髄に染みこんで、意識を飛ばすことも許さない。
「きひひ。正義感が強く、気高い女王様を食えるとは最高だ。ぐへへへ。たっぷり愉しませてもらうからな。気持ちよかったら、遠慮なく声をあげてもいいんだぞ」
レザーパンツを脱ぎおろし、妖鬼はまがまがしいペニスを剥きだしにした。それはあまりに長大だった。ちょっとしたペットボトルほどのサイズはあろうか。亀頭はテニスボー

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/